

Behçet 症候群と気象

東京女子医科大学小児科学教室 (主任 磯田仙三郎教授)

助教授 筈井和 • 助教授 菅井カクイ
カサ イ カズ スガ イ

小池保子 • 葛岡八恵子
コイケ ヤス コ クヅ オカヤ エコ

(気象庁) 根本順吉
ネ モト ジュン キチ

(受付 昭和41年9月30日)

緒言

ベーシエツト症候群 (Behçet's syndrome) は、現在いわゆる皮膚・粘膜、眼症候群の中に包括されている多彩な臨床症状を呈する疾患である。アフタ性口内炎、陰部潰瘍、再発性前房蓄膿性葡萄膜炎等、皮膚、粘膜、眼部に発現する主病変の他に、関節、消化管、血管系、更に精神神経系に至る全身的な症状をあらわし、これらの症状が再発をくり返しながら数年あるいは数十年という極めて長期に亘る経過をとることが特徴である。この症状の急性増悪を示す際、同じ日に幾人かの同症候群の患者が症状の増悪を訴えて来るようだという感じは、誰しも多少もつようである。この病因に関しては、Virus 起因説、アレルギー説、膠原病の一種とするもの等あり、未だはつきりとした定説には至っていない状態である。しかし、リウマチの関節痛は天気を予知すると昔からいわれているし、この疾患の増悪が同日に多数見られること、膠原病に属するという説もあることなどから、本症の症状増悪日の気圧配置を調べて見たいと考えていた。たまたま東京女子医大眼科を訪れていた9例の患者の経過を知る機会があつたので、眼症

状の増悪日の気圧配置を調べたので報告する。

対象ならびに研究方法

対象：昭和35年10月から昭和38年2月までの間に、東京女子医大病院眼科を訪れ治療を受け経過を観察できた9例の Behçet 症候群の患者である。男6人、女3人で、年齢は23才から46才であつた。

研究方法：既に発表した喘息、蕁麻疹その他¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾の場合と同様に、症状増悪の日の天気、気圧配置を丹念にしらべ、殊に同時生起の場合に注意した。

調査結果および考按

Behçet 症候群は、口腔のアフタ性の変化、外陰部潰瘍および虹彩炎の3徴候の長期間反覆出現を特徴とする疾患として、1937年 Behçet によつて記載されたのに始まる。その後、このような皮膚、粘膜、眼の症状をあらわす疾患を皮膚粘膜眼症候群として一括して研究が進められている。わが国においても「皮膚粘膜眼症候群の研究」という総合研究班があり、その決定によれば、完全型とは前述の3主要症状を有するもの、又は陰部潰瘍はないが皮膚症状を有するものをいい、不完全型とは3主要症状と皮膚症状のうち2症状を併せ有するものをいうとされている。この9症例はいず

Kazu KASAI, Kakui SUGAI, Yasuko KOIKE, Yaeko KUZUOKA, (Department of Pediatrics, Tokyo Women's Medical College) & Junkichi NEMOTO (Japan Meteorological Agency): An analysis of the relationship between the pattern of atmospheric pressure and appearance of eyesymptome in Behçet-syndrom.

磯田仙三郎教授 古稀祝賀・定年退職記念論文

れも完全型であつたが、3例は陰部潰瘍を欠いていた。その大略を表示すると第1表のようになる。

これら症状の中で眼症状の急性増悪を起こした日を調べて見ると第2表のようになる。2年5カ月の間で症状増悪の日は113日あり、同時に2例以上増悪した日は10日であつた。

月別に見ると11月、12月に最も多く、8月、5月、6月、1月が次いで多く症状増悪を示している。

季節別には大差はないが、冬に多く、春に少ない。季節の変わり目に増悪するともいわれるが、はっきりしたことはわからなかつた。

もつとも症状増悪の頻発する野○例について、昭和35年10月から昭和38年2月までの増悪日を調べて見たところによると、5月に増悪しているのは2年5カ月の間に1回だけという点が、一応注目されるが、季節的の変化は明らかでない。この例について、更に増悪を起こした時の気圧配置を調べて見たが、① 高気圧性、② 低気圧性、

③ 高気圧性から低気圧性へ、④ 低気圧性から高気圧性へ、の4つの場合にわけると、どの型にも同数発生して、この例は気圧配置型にはほとんど依存しないことが明らかである。

多数の例の同時増悪のあつた日の気圧配置について調べて見た。症例が少なく一致の回数が第4表のように少ないので、不確実な点も少なくないが、気圧配置型は次のようになつた。同時生起の偶然より期待される確率は、月間の発病数が少ないので、第5表にあげたくらいの一致でも、偶然よりはかなり高い確率である。同時生起の日は10日あり、その気圧配置は10例中6例は高気圧性の場合で天気は良い。残りの4例中2例は次第に天候が回復して行く場合であり、2例は低気圧の通過で曇雨天の場合であつた。それぞれの日の気圧配置を図示したのが、第1～10図である。

例数が少ないので確言するわけには行かないが、この対応の結果からは、多くの場合が高気圧性で晴天の場合であること、残りの全体の1/6にあ

第 1 表

	症 性 年	例 別 令	野○ ♀ 24	青○ ♀ 46	安○ ♂ 36	横○ ♂ 24	藤○ ♂ 42	山○ ♂ 34	宮○○ ♂ 31	柳○ ♀ 23	千○ ♂ 37
眼	前房蓄膿性虹彩炎 網膜炎 鞏膜炎 結膜炎		○ ○	○ ○	○ ○	○	○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○	○ ○
口腔	アフタ 偽膜潰瘍性口内炎 口角炎		○	○	○	○	○ ○	○	○ ○	○	○
陰部	潰瘍		○	○		○		○	○	○	
皮膚	結節性紅斑 多形滲出性紅斑 瘰癧 膿疱 血管炎 注射後発疹 化膿傾向		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○	○	○ ○ ○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○ ○	○ ○
関節	腫脹 眼痛		○	○		○	○ ○		○	○	
神経	頭痛 暈痛 神経痛 神経麻痺 シビレ感 痒感 精神症状		○ ○			○ ○ ○			○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○
消化器	不明の腹痛 胃炎 下痢		○		○	○ ○	○		○ ○	○	

第 2 表

性 年令 発病	野○ ♀ 24 22才頃	青○ ♀ 46 31才の時	安○ ♂ 36 昭36. 1	横○ ♂ 24 昭36. 3	藤○ ♂ 42 昭36. 2	山○ ♂ 34 昭33. 7	宮○○ ♂ 31 昭35. 11	柳○ ♀ 23 15才の頃	千○ ♂ 37 32才の頃		同時発症
昭和 36年	10. 11 r 10. 29 l 11. 12 r 12. 10 r 12. 20 l										
昭和 37年	1. 28 l 2. 18 l 3. 14 r 3. 28 l 4. 18 r 4. 28 l 6. 8 r 7. 14 r 7. 25 r 8. 10 l 8. 29 r 9. 26 l 10. 11 r 11. 21 r 12. 6 l	5. 12 l <hr/> 6. 8 r 10. 5 r	5. 20 l 9. 4 r 12. 7 r.l.						36. 6. 8 12. 6 12. 7	2/3	
	1. 12 r 2. 2 l 3. 16 l 4. 3 r 4. 23 l 5. 22 r 6. 5 l	2. 13 r 3. 1 r 4. 14 r		4. 7 r <hr/>	4. 16 r <hr/>	5. 21 <hr/>	5. 3 l <hr/> 5. 10 r			5. 2 5. 3 37. 5. 24 6. 4 6. 5	2/7

					12. 30l					12. 30r	12. 30 12. 31	
昭和 39 年	1. 8 r	1. 3l	1. 11								1. 1	
	1. 13 r.l.		1. 7 r								1. 7 1. 8 1. 12	
	1. 29 r		1. 13 l				1. 12 r				38. 1. 13	2/ 7
	2. 18 r.l.				1. 23 r.l.		1. 22 l					
					2. 12 r		2. 12 r	2. 5l			38. 2. 13 2. 13	2/ 7
	45	9	7	17	16	9	12	3		7	113日	10日重

注：——ははじめて来院した日と通院中止の日
 年月日は眼症状増悪の日、r右、l左
 最後の欄は特に気象に関連しそうに思われた日をぬき出している

第 3 表

季節別	春			夏			秋			冬			
月別	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	計
眼症状 発現	4	7	10	10	8	11	8	9	12	16	10	8	113
頻度	21			29			29			34		113	

第 4 表

番号	同時発生の日	同時 生起率	気圧配置
1	昭和36. 6. 8	2/3	H
2	37. 5. 24	2/7	L (東京雨33.2mm)
3	37. 9. 20	2/9	H
4	37. 9. 30	2/9	H
5	37. 11. 22	2/9	H
6	37. 11. 24	3/9	H
7	37. 12. 10	3/8	H
8	37. 12. 20	3/8	L~H
9	38. 1. 13	2/7	L~H
10	38. 2. 12	2/7	L (東京雨 0.0mm)

注 同時生起率：たとえば $\frac{2}{3}$ というのは3人中2人、ある日に発生したことを意味する。

H：高気圧の勢力下にある場合で晴天のことが多い。

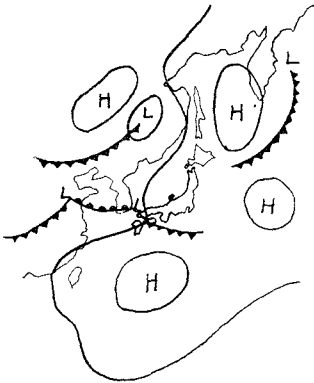
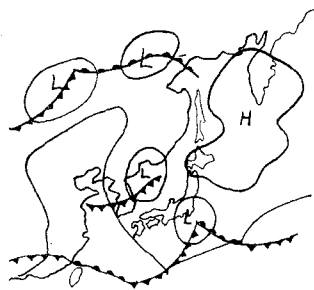
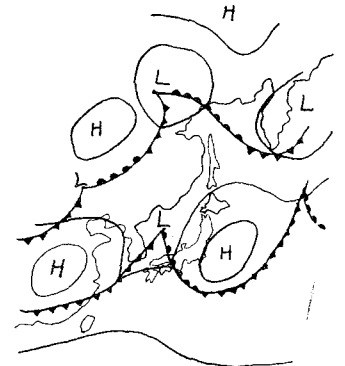
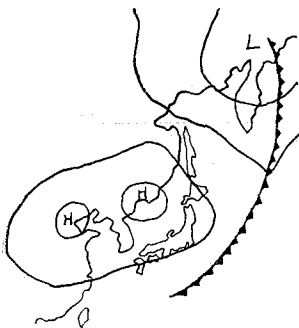
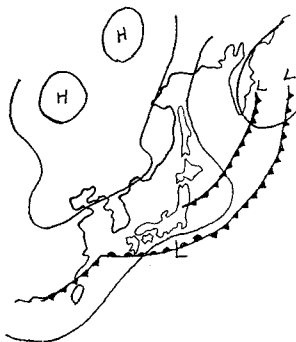
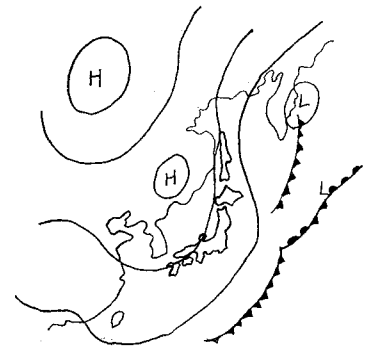
L：低気圧の勢力下にある場合で曇雨天のことが多い。

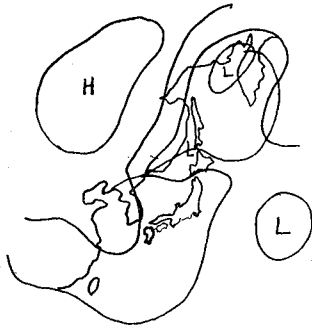
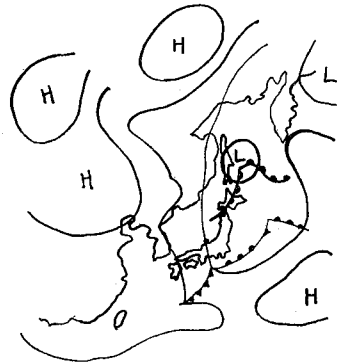
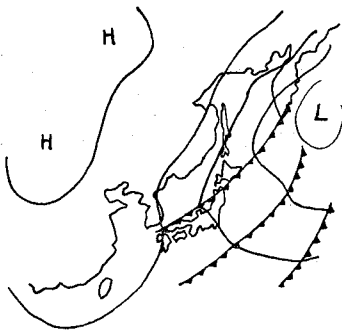
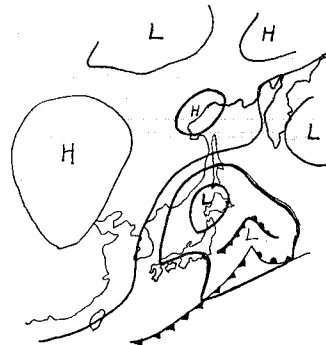
L~H：低気圧性から高気圧性にかわる場合で、次第に天気回復してゆく場合が多い。

たる2例が、これとは全く別な型の低気圧性の天気あまりよくない場合であることが言える。

眼発作は、寒冷前線通過前日に頻発し、温暖前線はあまり影響なく、口腔アフタは前線通過前日および当日に増加するとの報告がある⁹⁾。そして気圧配置は高気圧性、低気圧性いずれにも偏していないようだという、アフタ出現が眼発作に先行するのを前線の位置から推測しているが⁹⁾、私共の例は眼科を訪れているために、アフタについて詳しい記載がなかつたので、調べることができなかつた。眼発作については、前線と関係ある日は少なかつたし、同時生起10例中6例は高気圧性の気圧配置であつた。

本症候群の病因については、Virus 感染に素因も加わる¹⁵⁾とするものもあるが、アレルギー説もあり、膠原病類縁疾患¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾というものが多い。月経周期に関連して増悪する例もあり¹⁷⁾、ホ

第1図 昭和36年6月8日 H $\frac{2}{3}$ 。第2図 昭和37年5月24日 L $\frac{2}{7}$ 。第3図 昭和37年9月20日 H $\frac{2}{9}$ 。第4図 昭和37年9月30日 H $\frac{2}{9}$ 。第5図 昭和37年11月22日 H $\frac{2}{9}$ 。第6図 昭和37年11月24日 H $\frac{3}{9}$ 。

第7図 昭和37年12月10日 H $\frac{3}{8}$ 第8図 昭和37年12月20日 L→H $\frac{3}{8}$ 第9図 昭和38年1月13日 L→H $\frac{2}{7}$ 第10図 昭和38年2月12日 L $\frac{2}{7}$

ルモン説もある。私共もアレルギーによるものとするれば、症状増悪に何か気象の関連がありはしないかと考え、かつ同時生起が多いような気をする臨床医の経験から、今回は眼症状について気圧配置をしらべたのである。しかし多くの報告⁹⁾¹¹⁾¹⁸⁾は口腔アフタが最も頻発する症状で、眼症状に先行して現われるとしているので、アフタ出現日をしらべ、眼症状発現との関連を見るか、あるいは陰部潰瘍、皮膚症状などが気象と関連性が多いのか、未だよくわからない。

とにかく、同時生起の10例中6例が高気圧性、2例が逆の低気圧性の気圧配置に対応して眼症状の増悪を見たのであるが、この結果が何を意味するかは、さらに数多くの例の集計をまたなければはつきりしたことが言えないものと思われる。

結 語

昭和35年、10月から38年2月までの間、9例のBehçet 症候群の患者の眼症状の増悪日について、

気象との関連を調べた。

- 1) 男6例、女3例で、年齢は23才から46才であった。
- 2) 月別、季節別の変動は明らかでないが、晩秋から冬にかけて、すなわち11月から1月にやや多いようである。
- 3) 眼症状の最も頻発する例では、どの気圧配置にも同数発生していて、気圧配置型にはほとんど依存していなかった。
- 4) 多数患者の同時に症状増悪の日の気圧配置は、10例中6例が高気圧性、2例が低気圧性から高気圧性へ、2例が低気圧の通過による別な型の日であった。
- 5) 例数が少なく、この結果からははつきりしたことは言えない。

終に御校閲頂いた磯田教授、ならびに症例を提供され御協力下さった眼科氏原助教授に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 笠井 和・他：東女医大誌 32 (10) 397(1962)
- 2) 笠井 和・他：東女医大誌 33 (7) 314(1963)
- 3) 笠井 和・他：東女医大誌 34 (5) 202(1964)
- 4) 笠井 和・他：東女医大誌 35 (11) 683(1965)
- 5) 笠井 和・他：東女医大誌 31 (10) 437(1961)
- 6) 笠井 和・他：東女医大誌 31 (11) 498(1961)
- 7) 笠井 和・他：東女医大誌 32 (12) 514(1962)
- 8) 笠井 和・他：東女医大誌 33 (11) 539(1963)
- 9) 清水 保・他：日本温泉気候学会誌 25 (3) 262 (1961)
- 10) 清水 保：医学のあゆみ 06 (5) 223 (1964)
- 11) 渡辺悌吉・他：小児科診療 27 (6) 644(1964)
- 12) 三宅 勝・他：臨床眼科18 (2) 155 (1964)
- 13) 氏原 弘：東女医大誌 32 (12) 540 (1962)
- 14) 氏原弘・他：日眼会誌 67 (8) 861 (1963)
- 15) 鬼怒川雄久・他：眼科臨床医報 59 (2) 127 (1965)
- 16) 平野 実・他：耳鼻と臨床 10 (2) 112(1964)
- 17) 東 弘・他：日内会誌 53 (2) 247 (1964)